

會



報

1958年2月

196

日本山岳會

A・C百年祭
に出席して

一七九回小集會講演要旨

松方 三郎

ロンドンに行つた第一の念願はウェストンさんの墓がいまどこにあるかということであつた。これは以前から知つてゐる限りの人にとのんで置いたのが、ようとして分らなかつた。ウェストンさんのところには例の「日本アルプス登山と探検」の本に色々と書きこみをしたもので、日本の山を歩いたピッケルや、山岳會が贈つた茶器など日本の登山界にとつて記念すべき色々なものもあつたはずだが、そういつたものも全く見当らなくなつていて、ウェストンさんは子供がなかつたので夫妻のなくなつた後となつては今度もやはりお墓がどこにあるのかわからなかつた。

アルパイン・クラブのデイナーはクラブが最初の會合を開いた十一月六日の夜に行われた。横さんは十一月三日ロンドンに着き、五日、六日はアルパイン・クラブのお客として、クラブで宿をとつてくれた。宿はプリンス・オブ・ウェールズという宿で、ここは普通外国の旅行者などあまり泊らないところである。横さんはお客なので二階の風呂つきの立派な部屋に泊られたが、私は三階の屋根裏の部屋であつた。二階までは赤いじ

ゆうたんが敷いてあるが、三階には勿論そんなものは敷いてない。横さんは一九二六年以来のロンドンであつてひどく喜ばれてゐた。その晩は一緒にめしをくい、六日まで二人でロンドンを歩いた。横さんはオックスフォードにまねかれたが、ここでスイスのアカデミーのアルピニストとして当時鳴らしたアルミステツツや、ツエルマツトにある例のザイラー・ホテルの主人ザイラー、多分三代目と思うが、そういう人達と一緒になつたそうだがその時ザイラーが色々自慢するので、アルミステツツがザイラーをつつといつてあれが有名な横さんだといふと、ザイラーは口をつぐんでしまつたといふ話だつた。

私は横さんより一足先にロンドンにつき、マナスル頂上の石をまず第一にアルパイン・クラブにとどけようとしたが、何しろクラブは百年祭の準備で多忙をきわめてゐるのでなかなかセクレタリーに会えず、そのうちマナスルの石をみた人が、何だこれはそのへんにある石と変らないじゃないかなといわれるので、書記のブレイクニにやつと会つて石をわたすことが出来た。横さんの来られる前であつたアルパイン・クラブにはエヴレストをはじめヒマラヤの方々の山の頂上の石があり、中にはソ連が登つたムスターク・アタのものなど台にザイルを巻きつけた立派なものであつた。

デイナーは向うの人は白ネクタイに勲章をつけて出席した。私などは黒ネクタイで出たが、要するに私達が日本で羽織、袴で出るという程度のものである。イギリス人は大てい今度の戦争に出てゐるので勲章は皆つけていた。會場の入口にはハント会長とセクレタリーのジョーンズが立つていて一人一人にハントが握手をし適当な挨拶をかわしてゐた。控室はお客とわれわれ雑兵とわかれていて、雑兵のところではお酒を注文すると四シリング・サーとかウエイターにいわれいちいち金をとられた。お客の方はもちろんだでシエリ酒などが出ていた。デイナーにはアルパイン・クラブのメンバーが二三名、クラブの全員は五百名台だからその半分とちよつとが出席したことになる。メンバーのつれてきた友人が一三名、横さんなどのような外国からのお客が四十一名、そのうち半分が英国内の他のクラブで、あとが英国外で一番遠くから来たのが日本であつた。英国内の他のクラブからの出席者が二十、オーストラリア、カナダ、ベルギー、ケニアなどの外国からの出席者が二十一名となつてゐる。このほか、ハントの名で呼ばれたものが十三名いて、その中にはK.に登つたイタリアのデシオ、ムスタク・アタに行つたベレスキー、エヴレストの最初の隊長ビュリー、チベットの七年のハラー、スイスのエヴレストの隊のルフシグ、ツエルマツトのザイラー、フランスのレビュフアー、ヒマラヤのテンジンなどで全部で四百名のデイナーであつた。メイン・テーブルには雲のようには偉い人達が並び、横さんもその中に座つた。私は三番という割合にメイン・テーブルに近いところ

ろでとなりは一九三三年のエヴレストに行つたレイモンド・グリーンと長く日本にいたことがあり台湾の山の本を書いたマレー・ウォルトン、向いが有名なゾマーヴェルだつた。十名のうちエヴレストに行つた人が二人もいた。グリーンはずつと前私が訪ねたことがあり、その時留守だつたので女中に松方がまた来たといつて帰つたのだが、その女中がグリーンにいま変な人が来た、名前はマチュカターといつてイギリス人のようだが、顔つきが變つてゐるから用心しろといつたといふのでいまもお前の名前は忘れないと話してくれた。ウォルトンも非常に元気で、子供が南極に行つて本を書いてゐるがその本の中に私がこつたのは親父の影響だといふようなことを書いてゐる。

食事は普通で特別にうまいものはなかつた。一同は何しろ喰べるよりしやべる方が楽しいのだからそれもそうだろう。トリストに入つてまず最初にクイーン・エリザベス、クイーン・マダム、エジンバラ公、にと順にトリストをして、私のテーブルでは日本の天皇にトリストしてくれた。次にジェネラル・サー・マーシャル・コンウオールが立つてアルパイン・クラブヘトリストした。

アルパイン・クラブ五十年祭にはフレッシフィールドが会長だつた。あれから五十年たつてエヴレストも登られた。五十年祭にも出て今度の百年祭にも出たメンバーが八名いた。当時はいくら若くても皆二十五才くらいだつたので

はないかと思う。一九〇〇年に入会したヤング、ロングスタッフ、ロイド、アーヴィン、ウォーカー、フリットチャー、ジャクソン、ネクルトンの八名で大体八十をこした老人たちであつた。それからアーノルド・ランが立つてマウンテン・クラブス・オブ・ザ・ワールドに対してトーストしてから面白い挨拶をした。ランのいうのはもととアルパイン・クラブの会合には女性が出ないのだが、女性の前できうくつた後で、パイプを出しはつとくつるげの気持はまた特別なものだが、そういう気分がこの会合では味えないのは楽しみをへらすものだといつて皆を笑わせた。これに対してドビーフランス山岳会長が答辞を述べ、それから出席したお客にトーストがあつた。一番最後にロングスタッフが立つて一番最後にトーストしハントがこれに答えたが、ハントは出席したテンジンに対しお前も遠いところをわざわざ来てくれて有難うと述べ、この部分を特にヒンデイにおしてテンジンにきかされた、ヒンデイがすらすら出たところはいかにハントらしくつたが、これを書いたテンジンは非常に喜び立上つて合掌して答えるという場面もあつた。会は七時にはじまり終つて宿に帰つたのは十二時近かつた。この会と共にホテルで色々な登山の記念品の展示があり、マロリーが持つていたのではないかというアックスや、ヒラリーが一九五三年の春アルパイン・クラブに入会した時の入会申込書など珍しいものが出されてい

た。

ロングスタッフは秩父宮殿下のアルパイン・クラブ名誉会員復帰について、色々骨を折つてくれたものと思う。戦後昭和二十二年私が殿下の復帰についてロングスタッフに手紙で相談したところまだその時期ではないとはつきりことわつてきたが、平和条約の発効と同時にその手続をアルパイン・クラブはとつてくれた。これを殿下につたえた時非常に喜んでいただいたが、その陰にはロングスタッフなどの口ぞえが大いにあづかつていたに違いない。彼は私より小がらな老人だがとても元気で、日本大使館で英語版の映画「マナスル」を上映したときは、はじめすぐ百年祭が終わつたら帰るので出られないといつていたのだが、わざわざ夫人と共に出席して、きょうは日本の招待を受けたのだから、いつて「サケ」だけを飲んだ、ほかのものは全くのまなかつた。私は上映中彼の隣りに座つていたのだが、最初にマナスルの登頂は頂上に登つた者だけのものではなく隊全体のものだというタイトルを見て、わが意を得たとばかりヒヤ、ヒヤと私の手を握つてくれた。終つてマナスルの成功は「パフエクト・オナー・ガニゼーション」「パフエクト・リーダーシップ」によるものだといつてくれた。横さんもこの言葉をきいてさぞ喜しかつただろう。それがロングスタッフの口から出たものだけになおさらであつた。

(文責在編者)

インドの空

田口 二郎

デリーでは松方さんとふた夕を共にすることが出来て、ロンドンの百年祭やベルン、グリンデルヴァルドの愉しい話を盛り沢山すつかり堪能させて頂きました。松方さんをデリー・パレムの飛行場にお見送りしたのは昨朝でしたが今、同じ飛行機で同じルートをカルカッタに飛んでいます。

山登りの好きな者なら、一度この飛行機に乗り込むと、安全ベルトをとりつけたり、朝メシを食つたりする閑など、とてもとても有りません。飛び出すとやにわにヒマラヤが見え出すからです。大方の乗客が早朝出発のスイミン不足でうつらうつらしている中を、目を血走らせて、せまい通路を及び腰で、アチラヘ一走り、こちらヘ一走りと這へづつて、サリーをまとつた美しいスチュワーデスに何と落ち着かぬ奴なのか、とそのヒンシュクを買い、ケイベツされるのも、ヒマラヤの一番良く見えるガラス窓に自ずと身が吸ひ寄せられるからなのです。朝八時少し前にデリーから飛び立つてカルカッタに着く十時半までの二時間半の間、遠近の差はあれガッシャからエヴェレストまでの全山脈が見える。もつと正確には、出てから約一時間四〇分が山の見える時間です。その後は山は北東へ遠のいてしまふ。処で見えるというのは、大方の人には、白い山々が遠くに波頭

を立てるように涯しく立ちならんでいるという程度の見え方であつて、せいぜいあれがヒマラヤかという位。それでも、先月七日に、同じこの飛行機に座つた時には、日本から来た鉄鉱石調査団の人々が多かつたせいか、スチュワードスの連絡でラクノウの上空あたりに来た時、キャプテンが「左手をご覧ください。ネパール西部のヒマラヤです。三角の黒いのがダウラギリ、次がアンナプルナ、次がマナスルです」とアナウンスすると、普通は、山に興味のない鉄鉱石の人達も、ワツと湧きかえつて窓に寄りかゝつた。それに特別と今日はスチュワードスを呼びつけて「ナンダデヴィが来たらキャプテンに教えてほしい」と云つておいたのに、どうも要領をえない、がそんなことをいつている中に、ともかく、ナンダデヴィ、トリズル、ナイニ谷は過ぎてアンナプルナ、マナスル、ガネツシュ、シユガル・ヒマール、ガウリシャンカが見え出した。ガルワル・ヒマラヤまでは、プリズムののぞき通しだつたが、あれがどの山という百パーセントの確信のないのが、まず靴の底からかゆい足の裏をかくいたのだし感じが、たまらなかつたのが、ネパールに入つてからよくわかるので、満ち足りた気になる。

九時四五分、キャプテンが「一番はるかに見えるのがエヴェレスト」とアナウンスしたのをプリズムで見ると「どうもエヴァンスの本の写真にある南西面のカンチミたいな気がして仕方がない。そこでもまた気が落ちつかない。山が見

えるのに、その山の名前がわからないというのは、見る者には地獄ですからね、間もなく山からは遠く離れ見えなくなつてからホツとした。今まで随分緊張してからに違いない。もう十五分も過ればカルカッタです。

今日松方さんはダーズリンにむかい、今夕は「ウンダミア」にお泊りと聞いて、大変なつかしかつた。九月カルカッタのグラントホテルの中庭でビールをのんでいる二人の山男に出くわし、一人が立ち上つてなつかしげに私の肩をたたいたが、やはりロンドンから帰つたテンジン・ノルケ・シェルパだつたことをいつてに書きましよう、宜しく。

(十二月八日、デリー・カルカッタ機上にて)

山岳五十二年内容

山岳五十二年は年度内に発行を目標にして目下編集しております。内容は次の通りです。

カラコラムよりヒンズークシへ(藤田和夫) 南極圏紀行(渡辺兵力) 厳冬の燕岳から奥穂高へ(農大山岳部) 冬の前穂高北尾根より槍ヶ岳の登攀(法大山岳部) 宇奈月尾根より毛勝三山を経て剣岳へ(法大山岳部) 音信の内の木暮さんと私(沼井鉄太郎) 神威岳遭難報告(立大山岳部) 雪崩遭難者の捜索作業メモ(明大山岳部) 追悼、青木勝(佐藤久一朗) 名須川渡(藤島敏男) 渡正監(藤島敏男) 加賀正太郎(高野鷹蔵) 吉沢庄作(牧野富太郎) 今村幸男(小島栄) 貴堂武時(角田吉夫) 会務報告。

ムズターグ・タ

ワいの初登頂

望月 達夫

ジョン・M・ハートグに率いられた一九五六年の英国バルトロ遠征隊が、北西山稜から見事ムズターグ・タワ（二三、八六〇呎）の初登頂に成功したというニュースは、この怪偉な山容の岩峰が永い間登攀不可能を思わせていただけに、当時世界の登山界にかなりの話題を提供したことを御記憶の方もあると思うが、最近のアメリカン・アルパイン・ジャーナル（一九五七年）の記事によつて、その概要をお伝えしよう。

隊員はハートグ隊長の他にI・Gマクノット・デヴィス、ジョー・ブラウン、T・W・ベイトの三人。パキスタン工兵隊のリアズ・モハメッド大尉がリエゾンとして加わり、また高所用として四人のフンザ・ポーターがギルギットからまねかれ飛行機で一行に加えられたが、彼らは同行を喜ばず二三、三一〇呎のウルドカスから逃げ帰った。そこで四人のバルティ人が高所用ポーターに選ばれ、立派に活躍した。

五月二十八日、バルトロ氷河との合流点から約一哩半離れたムズターグ氷河上一四、〇五〇呎にベイス・キャンプが設けられ、六月の前半にはチガラウ氷河上にCI（一五、八五〇呎）とCII（一七、五〇〇呎）が設置された。チガラウ氷河の下部にあるセラックは、

北岸のモレーンに登ることで避けられたが、雪崩や落石に洗われた急峻な岩壁のためにモレーンが消えている所では、セラックの間や氷瀑の上にルートが求められた。CIとCIIの間では氷河のクレヴァスも多かった。CIIIはムズターグ・タワの西の山の二〇、八五〇呎に建てられたが、そこは時々落岩に洗われに高距一、九〇〇呎の猛烈に急な氷壁の頂きにあつてた。コルの南側をなしているこの氷壁が最初の大障害であつた。そこはコルの下にある岩壁までできるだけまっすぐに登り、岩壁では八〇呎の開いたチムニーを伝つてキャンプに達した。この個所の上部千呎には固定綱をとりつけて、天気が悪くてもポーターや荷をかついだ隊員たちが登降できるようにした。コルへ最初に到達したのは六月十六日だったが、テント三張、燃料、食糧、その他の装具が荷上げされてテントが張られたのは六月三十日のことだつた。ここでは氷の下にできていた水溜りから飲料水が得られた。CIVは西尾根の稜線上二一、一二五呎の地点に張られた。CIIIとCIV間の急激な高まりは、全ルート中の最難関、もし一〇、〇〇〇呎低くかつたならばモンブランのプレンヴァ・フェースの、あの大登攀と優に比較できるものだつた。この山の南面はオグヴァーハングした岩の北面は雪、氷、懸垂氷河によつてでき上つていて、この二つのフェースの境目は非常に危険にさらされてはいたが、ルートにとることができ、取りついてから三日目に遂に登ることができた。

水に覆われた岩場から氷を除き、固定綱を取りつけてルートを確保するには、多くの時を必要とした。こうした安全な方法をとらなかつたならば、無謀の挙と言われたかも知れないとハートグは書いていた。この個所の頂の直下には真横に尾根を横切つて高さ一〇〇呎の絶壁がある。ブラウンはこの壁を避け、手に汗をにぎるような角を南面にまわりこんで、トラヴァースしていった。CIIIの上部では二人一組のパーティーを二つにつつた。最後の絶壁での純粋な岩登りは何の障害もつけずに行われたが、下降時にはアブザイレンのために固定綱（ナイロン）がつけられた。この個所の固定綱は一〇〇〇呎以上にもおよび、一本々々しつかりと結びつけられ、五〇呎間隔でベッグによつてとめられた。CIVの上方では、南面のオグヴァーハングした岩場を避けるためルートは北面に求められた。それは氷上にふんわりと粉雪が三呎も積つている一本のクローアルを登るのであつた。この危険なルートを二〇〇呎登ると、今度はやや開けた雪と氷の上を通り、南面のしつかりした岩場（アルプスの第三級程度）に達して、ロープの長さを三倍程進んだ。最後の悪場は高さ僅か一〇呎しか違わない二つの頂を結ぶ瘦せた岩稜で、アルプスの第五級のむずかしいさである。ここでは北方へ八〇〇〇呎、南方へ六〇〇〇呎も、なんらさえないものもなくさらされている、さらに非常に鋭い雪稜を一五〇呎程横に辿ると、そこが頂であつた。岩場の頂に確保用のピストンが一本打

ち込まれ、それはまた下降時のアブザイルに役立った。二つのパーティーとも下降にさいしCIVの上方でビヴァークを余儀なくされた。ハートグの足指は凍傷に冒された。山頂（西頂二三、八五〇呎東頂二三、八六〇呎）は七月六日及び七日に登られ、各パーティーが互に援助し合つた。そして登攀隊のメンバー全員が頂に立つたのだつた。四人の高所用ポーターとリエゾン・オフィサーはCIIIより上へは行かなかつた。天候は高山地帯の特色を現わし、全期間の半分が悪悪かつた。また、ベイス・キャンプの背後の一九、〇〇〇呎から二〇、〇〇〇呎の間の岩峰三つが登られた。

このイギリスの登山隊の偉業に驚いている間もなく、この困難な岩峰ムズターグ・タワはフランスの強力な隊に再び登頂を許すこととなつた。イギリス隊が一方の側からこの山を攻撃しつゝあつたとき、ギド・マニョヌの率いるフランス隊が今一方の側から登攀をはじめた。隊員はアンドレ・コンタミ、パウエル・ケラー、ロベール・パラゴ、フランソワ・フロランソの四人。パキスタンのリエゾン・オフィサーとしてアリ・ウスマンが随行した。フランス隊が登つたのは、北方からバルトロ氷河に注ぎこむヤングス・キャンプ氷河であつた。ベイス・キャンプは六月十二日、一四、七五〇呎に設けられた。この氷河の西側を一八、四〇〇呎の谷まで偵察した後、北尾根は全く不可能だということが判つた。そこでこの氷河の東側を攻撃したが困難だつたが不可能

ではなかつた。急峻な氷瀑を避けるため岩場に設けられたロープウェイの上方、一六、七五〇呎にCIが設置され、CIIはこの氷河の上部一七、七〇〇呎に設けられた。ここからこの山の本体への攻撃がはじまり、岩と氷の尾根を登つて一九、七〇〇呎にCIIIが置かれた。この個所では四百メートルにも亘つて固定綱が張られた。CIVは頂上ピラミットのつけ根の二〇、六七五呎であつた。CIVから頂稜までの八〇〇呎にルートを確保するには、まる二日間を要した。一行が山頂にイギリス隊の人影を認めて大いに落胆したのはその時で、二度二日続いた暴風雪の直前であつた。だが固定綱を付けたお蔭で七月十一日には僅か三時間四十五分で再び頂に達した。しかし困難は極めて大きく、とくに二つの大岩塔が悪くて、やつとこのことに最後の岩塔のつけ根に到達した時はすでに午後四時であつた。その地点（約二三、〇〇〇呎）で一行はビヴァークした。登攀の最終段階は前よりも困難ではなかつたが、雪崩の危険を含んでいた深雪のため難渋を重ねた。山頂に達したのは七月十二日午後一時暗くなつてからCIVに帰着したのだつた。

この二つの隊の詳しい報告はいずれそれぞれまとまつた報告として出版されるだろうが、ヒマラヤの七千米で展開された高度の登山技術は、従来幾つか現われた八千米の登頂記とは別の意味で注目されていいであらうし、読みものとしても興味深いものである。

登頂のすぐ後に①

沼井 鉄太郎

登頂という行動のすぐ後に来るものは、登山者自身の登頂感激と同じ登頂仲間と取り交わす感激動作と音声と、それ等をひつくるための慣習行動と、更にこれを形式化した行事とである。

古来人は数え切れないほど山に登り、山頂到達の満足歓喜を味わったもので、今や初登頂、初登攀の未記録も世界的に数少くなりつゝある現状であるが、登頂または登路変更完遂における感激慣習行事は果してどれも同じようなものであつたであらうか。

本篇はこの問題についてまず初めは随筆風にあれこれと史的記載を振り返つてみることにしたい。さてここに或問する。今日登山人が常識的に取り扱つてゐる登頂という言葉は、登山という語ほど一般化された伝統語ではなく、大抵の字引には見当らない。或いは近代スポーツ登山の発展に際して発芽生長したものと解釈していいであらうか。そしてその発音も戦前派はとうちうと引つ張つたものばかりだつたが、戦後派特に最近の放送や映画や報道でとちうとつまつて発音するのが気になるようになって来た。マナスル隊員の内でもそう発音する人がある。ということはそうした発音人種が増加しつゝある傾向だともいふことになる。

今試みに上田万年博士共編・啓

成社の大字典(大正六年)の登山の項をひもといてみると、登山一つだけがつまつて発音する慣用音であつて、登高、登降、登攀などすべて登を冠した熟語はとうと引つ張つて発音している。もつとも慶大山岳部機関誌の登高行をとこうと呼ぶ人がかなりあつた。登攀も極く稀れにはんと発音する人があつた。登山、登高行、登攀と列べて口ずさんでみると、麗気ながら発音のずれがあながち不自然の発生でないようでもある。

しかし登山人の口にする語彙発音に徒らに混乱は招きたくない。登頂はとうちうと発音するだけにしようではないか。

マナスル初登頂

一九五六年五月九日ガルツェン(以下総て敬称略)と共に第一登頂隊として成功した今西寿雄隊員は横有恒編・毎日新聞社発行「マナスル登頂記」(昭和三十一年九月七日四版)の登頂記の中で、「十二時三十分。私は頂上に立つて……ガルツェンは、頂上に立つ私をカメラに収めて登つてきた。狭い岩の上であたりは手をとつて喜びあつた。足もとの岩場がグラグラと動いて、いまにもくずれてしまひそうに思われ、私は岩の背に馬乗りにまたいでしまつた。」と書いてある。

用無線電話機によつて第二キャンプに待機する横隊長に伝えられた際「私は頂上一番乗りに興奮した」と今西隊員がいつたとも記されている。

いづれにせよ第三者から見れば案外簡単なクライマックスの表現だ。しかしそれは人間の自然本性に発した感激と挙動の表現である。共同者互に手を取つて喜び交し思わず足場がぐらついて坐してしまふ程の法悦の極み。黙とうと握手とそして喜びに震えることが登頂全く直後のすべてであつた。記事にはないが、行事としては、エヴェレスト初登頂にならつてピッケルにネパールと日本の国旗を縦列に結んだものを予じめ用意して行つて頂点でこれを掲げ記念撮影をしたことが知られ、その写真は余りにも有名である。

なお第一登頂隊は「下から見たとき頂上と思われた岩峰の雪のたなで私も三本目の酸素ボンベに付け替えた。この岩峰にのぼる急な雪の斜面を慎重に下つた。登りに比べ、身も心も軽やかに歌でも歌いたたい気持ちであつた。登りに頂上の方向をまちがえて立てた赤旗を左にながめながら、真直ぐに第六キャンプに向つた。神経がにぶいのであろうか、このとき初めて頂上に立つたのだという実感がして、うきうきとしてきた」とあるように、登頂実感は気分下降し時が経過して高所生理条件の激しきから開放されて行くに従つて完成された。これがヒマラヤ巨峰登頂直後の実体であらう。

マナスル第二登頂隊では加藤喜一郎隊員が「五月十一日……頂上に登つた時の感じとか、感激を今までにどれだけ想像したり、空想したりしたかわからなかつた。そしていま登頂したその瞬間、今まで考えていたほどの感激は浮ばなかつた。ただほつとしたという気持ちだつた。そして頂上は高いなという気が非常にした。あとは降りる時にどうして下ろうかなと考えた。……さつそく、下田隊員を先に降ろす。僕は頂上の岩にザイルをひつかけて、ダブルロープにして一気に下つてしまつた。下のコルに立つた時は何かしらほつとした気持ちだつた。」と記している(上記「マナスル登頂記」)。

当時スポーツニッポン(六月十六日)に寄稿した加藤隊員の生々しい手記では「たゞ、やつた」という気持ちだつた」という所だけが少し違う。この方が本とうでもあり登山人の性格がありありと現われているようにも思う。

山のヴェテランにしては、いやまつとうに山のためにあつた未だ春秋に富むヴェテランにして、その卒直明快な表現には好感が持てる。ただ二日間を隔てての第二登であつたのは事実だから、その登頂感激は欣喜興奮型よりも飽和平衡型に傾きかゝつたのではあるまいかと推測される。しかしそれよりも注意すべきことには、登頂実感の完成が遅れたと見られる証左があることだ。即ち六月二十七日毎日新聞所載の記事「この数年間常に想像し夢みていた頂上の感激はすべて想像の感激であり、楽しきであつた。十日後ラルキヤ峠を越えてビムタコチに降つてマナスル西面のあの雄大な山容を

エヴェレスト初登頂

一九五三年世間最高峰エヴェレストではどうであつたか。ハント隊長の名著「エヴェレスト登頂」(朝日新聞社昭和二十九年版参照)中ヒラリーの登頂記には「最初の感じは助かつた、もはや切るステップも、乗りこえる尾根もなく成功かと思はせぶりの瘤もなくなつてしまつたという救いのそれであつた。」と書いてある。冷酷そのものの死闘から最後にかち得た初登頂の登頂第一次感はいくも精魂をつくした挙句の安堵感であつた。

登頂直後の感激行動に続いて、ヒラリーはテンジンに国連旗、イギリス、ネパールの国旗を振るポーズをさせた写真撮影をつた。頂上での記念撮影を含めて四冊記録写真撮ることは、近代登山での慣習でもあり、かたがたそれは後日初登頂の裏付証拠を整えるための実際的に可能な一方法でもある。

撮影に次いで頂上からの展望と印象。その内にテンジンは雪の中に小さな穴を掘り、中にチョコレート、ビスケット、甘味菓子などの供物を入れる。それはさうやかなものではあるが、あらゆる敬けんな仏教徒がこの高い絶頂に神々の座があると信じていることのしるしでもあった。そしてヒラリーもサウス・ヨールでハントに頼まれた小さな十字架を、雪の穴をつくつてテンジンの供物にならべて埋めた。東西互に異なる宗教上の最も簡素な慣習行事の二つが、一見奇妙だが、實際何のわだかまりもなく平行調和して行われたことは、山なればこそとも思われかつまた地球の第三極の最先端での出来事だつたことに深大な興味と意義を見出さないわけには行かない。

ハントの著作から約一年たつてヒラリー自身の著「ハイ・アドヴェンチュア」(一九五五年)が出版されたが、その第十二章に登頂時の模様が更に詳細鮮明に描かれている(松方三郎・島田翼訳「我がエヴェレスト」昭和三十一年版参照)。著者が本篇執筆の立場においてヒラリーの著書で注意したことは、登頂実感の完成が彼のエヴェレストの場合殆ど遅延されなかつたことなのである。

「初めこそ二人が絶頂に達したという事実を把握するのは難かしいように見えた。とても疲れていたし、安全な所まで長い下降をしなければならないことも知り過ぎていたので、得意然とはなれないのであつた。けれど成功心という事柄が次第に明瞭に心の内を貫いて来ると、漸く明るい満足感が

身内に拡がつてゆくのを感じた。それは調子の高いものではなかつたが、かつて他の山の登頂で感じたよりも遙かに旺盛なものであつたのだ。このように滞頂十五分の短かい間に登頂実感の完成があつたわけである。

なおまた登頂感激を表現する行動は、まずヒラリーから手を差し出して無言の内に握手したが、これは彼が記す如くアングロ・サクソンの、筆者がいうなれば西歐的慣習であつた。ところがそれはテンジンにとつては不足で、彼れテンジンは思わずもその腕をヒラリーの両肩に投げかけ、そこで二人は息のとまるほど背中をたゞき合つて互の祝福を交わしたのである。テンジンのこの挙動が民族的慣習であるかどうかは、こゝに未だ語るに足る資料を蒐集していない。しかしそれは全人類を通じての最も自然な、最も普遍的な感激感謝表現の慣習律と見ることはできなだらうか。

下山に當つてテンジンは彼のピッケルから旗を外して、山頂には何もそれ結びつける物がなかつたために、その旗を雪の中に押しこんだ。これは登頂記念を保存する慣習的な一つの試みであつて、恐らく長くは残っていないであらうとヒラリーも考えた。

さてまたヒラリーの山頂での仕事はまだ一つ残つていたが、エヴェレストの最高峰は雪のかぶつたピークだつたので、頂点から四十フィート下降して始めて岩肌に見える地点まで来てから、彼は一つかみの小石を拾つてポケットにためこんだ。一寸馬鹿臭いようにも

思えたが、下山してみても寧ろ持つて来てよかつたと分かつた。と書いているが、絶頂石採集はその後マナスルでも意識的に行われ、科学調査的の一面もさることながらそれこそ古来初登攀以外でも登山人が屢々行い來つた一つの登山慣習ではないか。

追補一。N・テンジン述、J・R・アルマン記、井上勇訳「ヒマラヤの男、テンジンの生きざき」道(一九三三年一月、紀伊国屋書店発行)という本をみると、テンジンが山頂で埋めた供物には上記の外に、娘のニマがくれた赤と青の短かい鉛筆があつたようだし、またテンジンの記憶では、ヒラリーが頂上に置いて來たのは十字架ではなくて、ハントがマスコットとしてくれた白い眼をした小さな布製の黒い猫で、それを彼は鉛筆とお菓子のそばにおいた、と語っているようである。

追補二。ヒラリーとテンジンは下山にとりかゝる前に、一九二四年チベット側から最後の登頂を試みて行方不明となつたマロリーとアイヴィンの残したしるしが有りはしないかとあたりを見廻したが何一つ見つからなかつた。この行動と注意は、先駆者の生死いづれにおいても、また登頂不明であるか否かと拘らず次善の光榮に浴して登頂した者が必然につとめる一つの行(ぎょう)であり祈りであり、反面また、自己の得た良果に對しての反省確認法でもある。

追補三。登頂感激に次いで誰しも起す走馬灯の如き回想の中に、テンジンは誰よりも身近かにランペールの顔があつたことを語つ

た。前年ブレ・モンズン期に、スイス隊のメンバーとして、その二人が南峰頂上から二〇〇米下のだいたい八五五〇米(デイレンフルトの記載による、ヒラリーの精密計算によれば八五三四米、ランペールによれば八六〇〇米)という最高到達点で、身心ともに限界に達して下山の止むなきに至つたこと、並びに同年ポスト・モンズン期にも共にサウス・コルに達して登頂路に心を砕いたことを考えれば、無理からぬ優先情感であつたであらう。實際また彼れテンジンは、ランペールからもらつた赤いスカーフを、その時もしつかりと咽喉のまわりにしめつけたのだつた。一般登山人でもこういう場合は案外に多いと思う(一九五七年六月末稿)。

早池峰山新コース

太田 広

岩手の早池峰(一九一四米)登山口は川井村平津戸、大迫町岳、遠野市大出と知られておりますが、高松山(一六七米)より早池峰剣ヶ峰を経て山頂に達する尾根コースは、県内の岳人にも知られておりませんか御紹介します。釜石線遠野駅で茂市行の国鉄バスに乗り、二時間五分で川井村江繁に下車します。或いは、山田線川井駅前で遠野行国鉄バスを利用すれば、四十分で江繁に着きます。停留所より薬師川の右岸に沿つて、向田、大畑、神楽を過ぎ左岸に入つて、薬、タイマグラを右に見て三時間半で、営林署の出張所

に到着します。道路はブナ材積出しトラック用で、薬師川は底砂の一粒も見える程の清流です。江繁より小型トラックの、利用も出来ます。出張所より五分位で川は右に曲り、左側に小田越に入る指導線があり二時間半で小田越に達し、大出口と一緒にあります。川に沿つて右、右と歩くと、一〇分で貯木場に着き、再び合宿を過ぎて一〇分で、右側のブナ立木に褐色の輪を印してある旧道の入口に到ります。一寸御注意下さい。されば、一本橋ですので判ります。一本橋(丸太)を渡つて旧道に入りますが、旧道は助平田を経て、山田線の箱石、平津戸に通じています。途中の道路は狭いですが判りやすく、水でも不自由しないで、一時間半で助平田に着きます。降り口の手前に古い指導線があり、左に入つて立木の印を見ながらダラダラの登りを一五分で高松の三平に出ます。助平田、三平は放牧場です。地竹の繁みを右に見て一寸降りに入り、更に尾根を越して四〇分で桧林に入ります。中間より急坂に接しますが四〇分で瘦せ尾根の端に達します。三平から山頂までは水はありませんから御注意ください。瘦せ尾根を歩くと、天野山、薬師岳を眺め四〇分で岩峰に着きます。展望も相当なものです。これから五〇分で三角点(一六三八米、四〇分で剣ヶ峰、一五分で賽河原、一五分で山頂に達します。降りには前記三個処の中、岳口に面白味があります。以上概略を書きましたが、御参考になれば幸いです。(五万分の一、遠野、土淵、川井、早池峰、大迫)

☆ガルツェンの近況☆

九月二十三日付の御便りに接しながら、御返事の遅れたこと、申し訳なく思っております。といふますのは、私は今秋フランスの登山隊と一緒に東パールの峻峰「ジャヌー」へ出かけており、たつた今無事にダージリンのわが家へ帰つて貴方の手紙を見たという次第なのです。

しかしこの山の登攀は非常に大変な仕事でした。ジャヌーへの登路は非常にけわしく、急峻であり、登頂可能なルートが発見は困

久しぶりに黒部の源流地を見て来ました。去年（昭和三十一年）九月に出来たという湯俣川の道を上つて、三俣小屋を中心に鷺羽、蓮華、祖父、雲の平などを歩きまわりました。

昭和四年七月角田吉夫君一行が湯俣を溯つて以来記録のない、高瀬中で最も悪い谷とされている湯俣谷に新道が出来たということが私の興味をそそつたからです。

湯俣の噴湯丘の先からこの道は始まるのです。磯づたい、崖道、森林帯へと入つて行く。道の計画はよく出来ています。まだ出来たばかりなので、道幅も狭く、大雨のときには丸木橋が流されて通過不能になることもありすが、追々踏跡が固まり、橋もしつかりかけられればよい道になると思ひます。

この道は三俣小屋の伊藤正一氏が私財をもつて切り拓いたもので、北アルプスの中央部へ入る最も近い、今日まで登山者から待望

難なものでした。それでもわれわれは、この山に対して唯一の登路であるとも申してよいヤマタリ（YAMATARI）氷河（南西面）からのルートを発見したことが出来た。われわれが発見したこのルートとても、それは非常に危険な困難なものでありますが……このルートを示す一枚の写真を同封しておきますから御覧下さい。そしてわれわれは一九五八年に八人のフランスのサンプと一緒になり再びジャヌーへ向うでしょう。このチームのリーダーは、多分マカールへ行つたフランス隊の

されていたものです。右岸は殆ど全部赤、硫黄の山壁、断崖、崩壊にめぐらされた森林は少く、左岸の森林帯を主として利用したところからこの道の特色があります。道から溪流もよく見え森林も立派で、ワリモ沢の上の赤沢付近から鷺羽東尾根の南側を道はよくつけられ、最後に緩い斜面を迂回してつけられ、上りきつた処が鷺羽乗越の大きな鞍部で、そこに三俣の小屋があります。

私のこの付近を歩いたのは、大正六年、十三年それから昭和の初めですが大正年間には小屋もなく昭和に入つてからチャチな小屋が出来たと覚えていました。今夏行つて見ると、まだ小屋は狭く古いものですが、皆登山者を殆ど見なかつたこの付近が、登山者でにぎわっているのを見て驚きました。鷺羽乗越にキャンプが、十以

旅 信 冠 松次郎

上、雲の平にも五つ位見うけました。そして文字通り三々伍々登山者は山から高原へと周遊していました。

久しぶりで気持のよい旅をしましたが、ただ一つ不愉快な感じを受けたことは、祖父岳からひと眼で見渡せるような、そう広くもない雲の平の南面に様々な名がつけられていたことです。これは三俣小屋の案内図に記されているものです。誰がつけたか知りませんが、日本庭園、奥日本庭園、スイス庭園、ギリシャ庭園、アルプス庭園、アラスカ庭園などと云う名が並べてあります。

雲の平というのは中部山岳の最も奥深い処にある原始的の御庭のことをいふのです。つまり日本の山地の最も高く奥深い処に秘在する自然の成せる庭園です。今更にと新しく日本庭園などと云わなく

当の赤ん坊であつた息子のラクバも日増に生長し、もう歩き始め、ジャベリ始めております。日本山岳会員の皆様、マナスル隊のメンバー諸氏にはくれぐれも宜しく御伝え下さい。

ダージリンのわが家にて
一九五七年十一月九日
ガルツェン・ノルブ（松田宛）

市川梅子氏より寄附

昨年十二月二十五日、防衛庁陸軍厚生課勤務の市川梅子氏より、植隊長宛に、同所勤務の城所事務

とも、それは昔から雲の平、奥ノ平として知られ、私たちに親しまれている名であります。まして日本の雲上の庭園へ外国の名前までもつけたのはどう云う訳か解しかねることです。

それに付いて幾つかの苦情が私の処へ来ています。その一つを挙げて

「三俣レンゲの案内（印刷物）」を見て感じたことは、雲の平にギリシャ庭園、アラスカ庭園、スイス庭園などの名がついていたことです。これは一体誰がつけられたのでしょうか、根拠はわかりませんが、同じつけるならもつと適当な名がなかつたかと思ひます。秘境にこのような名がつけられることは単なる感傷ではなく、何か冒瀆されたやうに感ずるのは私ばかりではないと存じます。何かの機会にぜひ啓発していただきたいと存じます云々……」

山日記発行

予定より大分遅れましたが、山日記一九五八年年度版が出来上りました。日記欄、自由日記欄、白紙方眼紙、天気図などは前号と同じだが、本文の登山の注意、装備、食糧、医学、遭難対策、気象、登山と地図、山での岩石の見方、山村民俗、山で出来る料理、山の写真、山岳図書、日本の山と峠、山の映画などすべて書きおろしの權威あるもの、特に昨年の山岳用語の欄は山の小辞典と名も変り、それぞれの専門家により執筆されている。定価二五〇円。送料廿二円

戦後に見た本

小野 幸

今度の戦災では山の本もかなり失なつてはいるはずだ。しかも洋書については地方への分散率がすくなく、都会に存在していたものが多かったのではなかろうか、ことにその消失率は高かつたにちがいないと思ふ。しかし、その半面蔵書主が亡くなつたり、本どころではない、などのことから本を手ばなす人にあつたので、古本屋には戦前より、数こそすくなくつたのですが、めづらしいものも現わされた。その中で、私の見たものだけでも一つ一つメモしておけば、面白かつたのですが、ついその場限りで、忘れてしまひました。それでも、その中で片々ながら思い出して、なにかの資料に書名を記して見ることにします。その中には、会員の方も入手された本があるかも知れません。その方はこの文をよまれて、にこりとされるでしょう。

日本のものから申しますと、ウオルトンのものは今でも、よく本屋に出ますので記すまでもないでしょう。ウェストンの「日本アルプス」は神田の松村で二冊見ました。それも昭和二十六年頃に同じ棚にありました。その一つは新しく製本されて、表紙も変えられ、寸もつめられてありました。今一つは元のままのよい本で、この本としては保存のよかつたと思ひま

す。どちらも一年ほどありました。その姿が消えました。

それから、ウェストンの「プレイグラウンド」は合計四冊ほど見ました。戦後、最初に見たのは本郷の井上でした。この本はいつ本屋に出て、どれも美しいものです。その次は一誠堂でした。それから上野松坂屋の古書展で二度、その一本を入手しました。「日本アルプス」の美しいものはなかなか見られませんが。

五反田の白木屋が古書をあつたつていた頃、小島鳥水氏の蔵書が二冊出ていました。いづれもアメリカの地理もので、美しい絵の本でしたが、山ではないのでそのまゝにしました。その時、鳥水氏のお宅にうかがつて書齋を見せていただいた頃のことや、山岳会の幹事会を、その書齋で先生をまちえてひらいたことなどの、なつかしい思い出にひたれました。あの美しい書齋の、あの美しい装束の、本が、みんな散つてしまつたのだ、と考えると哀しくなつたのでした。

戦前のことですが、石一郎さんにマンメリーの「アルプス・コーカサス」の元版をお借しする約束をして、家をさがしたのでしたが、どうしても見つからず、ほんとうに失礼をしたことがあります。戦後、神田の井上で私のよりも美しいのを見ました。それは他の美術書十何冊と一くくりになつて価がついていましたので、主人にこの本だけ、ぜひゆづつてもらいたいと申しましたが、くくりでお願ひしたいといわれて、引きがりました。その後、まもなく店頭にあ

りませんでしたので、多分、市へ出したのではないかと思います。その後この店にコンウェイの「アルプス」の美しい絵本が出ていました。

一誠堂で思い出しますのは、ブロックトンの「アルプスの峠」です。昭和二十五年頃、二階へ階段をのぼつたところに一年間ぐらいつ置かれていましたが、いつのまにか消えてしまいました。

昭和二十三年の初め、ふとウィンバアの「スクランブル」のフイラデルフィア版を入手しましたが、ふとその扉に「ワイ・マキ」とローマ字の署名がありましたので、その旨を模さんにお便りしますと早速お返事をいただきました。

「ウィムバアのアルプス登攀記」で小生署名入りのものを御入手の由、珍らしいことと存じます。蔵書は一冊残らず、戦災で焼失しましたので、その本は余程前に誰かが小宅よりもつて行き、転々してお手に入つたことと存じます。貴下の下に納まれば、これに越したことはありません。近頃つくづく思うのですが、蔵書を貸すということとは、結局は失うことと判りました。愛書家の貴下も御用心なさいまし。

しかし、幸福なことに模さんの御蔵書の中のソシエールの「アルプス」が、同氏より山岳会に寄贈されたので、これも焼失をまぬがれた仲間かと、ひそかにうれしく思つてゐるのです。

グイド・レイの「マッターホルン」の英訳本が東大農学部の前

本屋に出たことがあります。さし絵の多い本で、だれもが欲しくなるものです。つい最近この本らしいのが日本橋の丸善に出ました。丸善で思い出しますが、フオーブスもが、二冊出ていたようにおぼえていますし、クリリッヂでは「自然及び歴史におけるアルプス」や「チンゲル」が出ていました。

たまに神田や本郷、それから早稲田や杉並あたりの本屋をさまよつて、まさかと思うような店の棚に山の本を発見したよるこびはひとしおのものがあつた。それが自分の求めていた本であれば、その思いがなおさることなので。(三一・九・三)

奥只見鬼ヶ面山偵察行

— 東北大の部報より —

東北大学山の会・山岳部会報が遅刊しているので、記録・報告を主とする部報第一号が、学生の手で編集謄写されて、この程筆者の所にもとどいた。内容の内に標記の記録(橋本一氏記)や外に注意してよい若干のものがある。

鬼ヶ面山は浅草岳の近隣にあつて、その東面只見沢流域に属する岩場・流場は、今までわずかに登歩溪流会と長岡山岳会の少数の人にのぞかれただけであつたらしいといふ。一九五七年六月七日から十一日まで東北大山岳部鈴木重信氏等が七名の一行が、新人訓練をかねて偵察行した。若松から只見川右岸にバス四時間、田子倉ダム工事現場を通つて只見沢出合から左岸の道、カワウソの右岸の雪の

台地にキャンプ、翌日右岸藪こぎの後魚止の滝下に出て雪渓を渡り滝の左岸をまいて広河原着泊。一日滞在偵察。十日浅草岳登頂パーティとに分隊行動。登頂パーティは右俣の雪渓を登り、ニードル・ピークの基部と等高点附近で登攀パーティの苦斗を見る。浅草岳登頂後、右俣をグリセード、出合で中途撤退の登攀パーティの出迎えを受けた。

記文には、「……鬼ヶ面のカーボルデンにわけ入つた。初夏の今も、深々と残雪をとどめ、それを囲むかのように、谷川岳にまさるとも劣らぬ程の岩塗がそびえていた。人を圧するような岩塗と残雪と幾条にも落ちる大きな滝を見た時、どうして岳人に踏み入られることなくこゝに眠つていたかと疑つたくらいであつた。……しかし、その流場も岩壁も、その登攀には非常に高度の技術を要求するものらしかつた。」とある。夏日北アルプスから帰仙の途拙宅に立ち寄つた東北大の部員で筆者の親類の森滋君からも、同じような実見談が語られた。

谷川岳と優劣如何という程の岩壁とは一寸考えられなかつたし、北越方面オーソドックス登山の先覚者である藤島敏男君に聞くと、日本の山に岩場なんかあるもんかと剣もホロ、の御挨拶、それは壁だよといった筆者にしても、約束した写真はまだ手にしてないの、いまだに半信半疑でないの。しかしかつて奥羽の地で船形山の善族中に黒伏山の削壁を見つけて試登し——去九月東北大の小島

修・鹿野英志両氏が登ったが、やはり昔筆者等のとつたルートと余り違わなかつたらしいことを、前記森君から聞いた。羽越境朝日連峰の祝瓶山に着目して岩永信雄君の春季初登を誘ひ、飯豊の牛首尾根東面を企劃して、これはいまだに果せない筆者としては、日本は日本なりに、奥羽は奥羽なりに、今の時代は時代なりに、若き有為な人々のアドヴェンチャーの対象になる新境地が発見できたことに満腔の賛意と支持を表明せざるを得ない。

も一つ重ねていえば、近くパタゴニア・アンドスの秘境登攀に向う神戸大を主としたパーティが最近神戸附近八四四米の岩山——雪彦山——で合宿訓練して登攀テストを行つたことは、意義なしとしないではないか。日本のさうやかな山も世界の山に通じることを知るべきである。

部報には鬼ヶ面山の外に、その概念図、朝日根子川、鹿島槍、北岳の記録、五七年度剣合宿及びアキシデント記録、山行一覧などがある。全十六頁のパンフレットだが、一登山学生群の情熱と真面目さは十分に汲みとれる。今後とも切に自愛発展を祈るものである。

—(一九五七・一〇・一九)—
(沼井鉄太郎)

岡野金次郎氏死去

日本の登山界の草分けの一人であつた岡野金次郎氏は二月十四日交通事故のため平塚市新宿の自宅附近で死去された。享年八十二才であつた。本会を代表して神谷恭氏が葬儀に列席した。



会員通信

今冬の槍行から

橋本三八

過去五冬の後立山から今冬は少し方面を変えて、槍縦走(燕ノ槍コース)に決めて、夏の偵察行から荷上げ交渉など一応の準備が出来ると、隊員の身体訓練に、秋からは勤務が終わって毎日三時間ばかり体操、マラソンなどを続け、十二月中旬に最後の荷物を送り出し暮の二十六日夜に先発三名を出発させ、二十八日夜、本隊十三名は出発した。

勤め人の登山隊である関係上、日数は始めから十日間にしぼるという第一の無理があるので登頂は第二にして、若い連中の訓練と、装具に新しい薪ストーヴ(B・C用)とプロパンガス(B・C及び前進キャンプ用の二種類)の試用ということをやった。プロパン・ガスの成績については詳しいデータなどまだ整理中なので概略だけにして、薪ストーヴ(組立)は煙が洩れたこと、煙突と天幕の接触の部分(石綿紐)が悪かつた

などで、この部分さえ充分に整備すれば、暖房用としても炊事用としても、他の器具に随分優ることが判つたので、これは新しく今回の経験で再製作することにした。

プロパン・ガスについてはB・C用に十キロのもの、前進キャンプ用に五キロのものを現地の会社から有明町に納入させた。重量は十キロのもの風袋十三キロで計二十キロ。五キロのもので風袋六キロで計十一キロのものを使つた。

これは大で一〇〇時間、小で五〇時間使えるのであるが、寒地の場合は多少違つて来るので、三〇パーセント位少く見積つた。B・C(合戦小屋下)は大体気温は外気温プラス三度位が平均であつたが、容器は安全を期してテント外に置いて(家庭用として屋内に置いて火点を起した記録があつて、一時は危険率過大に考えられていたが、現在のものは臭気がつてあるから大体洩れればすぐ判るけれど、為念)これは非常に効果は良く、ラジウスの地位を逆転させた感じがあつた。しかしこのテント外に置いたことは、日が経つにつれて燃焼が悪くなつて来たので後で調べてみると、容器はやはり保温を施さねばならないことが判つた。(藁などで包み込んで置くこと)また重量の点であるが、これが今まで使用されなかつた一番の難点でもある。しかし今回の経験でその効果と比較して考えれば、有利という方が上廻るのではないかと思われた。用具のことはこれに就いて。

合宿訓練としては、耐寒、耐風などの点。荷上げなどに示した一致協力の精神。秩序ある行動など、いゝ成績を納めることが出来、来期は登頂に集中出来る自信を得ている。

自分の隊は大本井から先は偵察で終つて、大天井下でテントを張つたが、一月二日の夜の風でテントの支柱が折れるやら、三日(気温マイナス二十度、風速十五米位)の徹夜では燕までの二時間半位の間に全員が軽い凍傷にやられた。(八幡製鉄山岳部)

剣山から祖谷へ

古沢 肇

八月十二日、阿波踊りで賑う池田の町を離れて、徳島本線の貞光駅で降りた。ガタ／＼の乗合で川に添うて一字奥山まで行く。見上げる兩岸の山々の遙か上の方まで人家が点在しているのを見て、さすがに阿波は山国だと思つた。

剣山の登山口には、穴吹口というのもあつてこの方が由来は古いようだが、距離からいつたら間違いないが、貞光口に近い。麓から三時間、頂上まであと一時間というところに上越えというところがあつて、大剣神社と田福密寺とがあり、仲良く並んで登山者を泊めている。自家発電で電灯を点け、一年中人が住んでいるから里と変りはない。蚤が多いのが情けなかつたが、避暑には持つてこいの場所だ。近頃は正月の登山が仲々盛んだそうである。

大祭期を過ぎていたので、夏とはいっても、白衣の登山者は少かつた。先生に連れられた中学生や、行儀の良いくない近在の青年たち

が、思い／＼の恰好で登つてくる。なかに大型リュックに登山靴で武装した大学生もいるが、なんとなく暑苦しい。「何ごとぞ花見人の長刀」である。道が良いから夜道もかけられる。大いに見越を早立ちして、頂上で日の出を拝んでから下つていよう。見越からは高山らしい気分だ。

頂上は三角標(一九五五米)が立ち、広い草原に赤と黄の花が咲いていた。測候所があつて所員がキャッチボールをしているので、赤い花の名前を聞いた、ゲンノショウコだと教えてくれた。何とも色気のない名前だと思ひ、胸を下げた先生らしい人に聞いた、こんどは四国フクロ草だといつた。どつちが本当か帰京してから山下一夫さんに伺つたら、どちらも本当らしく、こちらの開き方が拙かつたらしい。黄色の花はタカオトギリという由。

祖谷は開けたという話を聞いて、あまり期待もしていなかつたが、それでも空の方を見上げてさえいれば、少しは昔のさまを想像できた。それに下流の西祖谷の方が溪谷美に勝つてゐる。善徳で「かざら橋」を見て、また池田へ舞い戻つた。

元橋の宿

望月 達夫

上の芝や苗場の山頂では、すでに草紅葉の色が美しかつたけれども、こみ合つた頂上小舎の一夜は感心したものではなかつた。それでも翌朝おそ立ちで赤湯まで下ると登山者の気配もなく、すつかり

嬉しくなつて真赤な湯につかり、充分休んだあとと清津川に沿つて下つてゆく。この川の兩岸が自然のままの姿なのは、今では赤湯から二時間ほど下つた大柄沢の近くまでである。というのは、そのすぐ下手に東京電力が大きな工事をはじめ、浅貝の方面から立派な自動車路がこんな奥まで出来かかつているからだ。

この自動車路をいい気になつてすたこ歩いたのがわざわざいして平標山から西に出た松手山の尾根がずつと左後方に遠のき、目の前に浅貝川をへだてて火打峠が見える所まで来て、はじめて南へ来過ぎたことに気がついた。日は暮れかかるし、腹はたつしだが、戻るほかに手はないので、今歩いてきた路を引返し、元橋への分れ目を見出したときはすでに夕闇が濃い。元橋の一軒家へ着いたのは予定より二時間もおくれた七時過ぎであつた。

(われわれの通つた自動車路は古い地図には出ていないが、浅貝川の西岸を南進し浅貝の近くで三國街道につづいている由)

元橋の宿は昨夜とはうつつかわり、われわれのほかに測量関係の人が二人泊り合せているだけ。久々に、ひなびた山家へ泊つた感を与えられたのは嬉しかった。主人の富沢太二君は小学生の頃、当時雪の上越の山々を登るためにこの村へやつてきた角田吉夫氏からスキーの手ほどきをうけたと言つて、角田さん大変なつかしがつていた。帰京してから古い「山岳」(二五年三三)を引つぱり出して「積雪期の仙ノ倉山及びその附近」

という角田さんの一文を見ると、この夜の炉辺話に出てきた太二君の父親の元吉や元吉と同じように熊狩りの名人となつた富沢孝太郎の名前がちやんと出てくる。そればかりではない小学校の生徒が大勢スキーを習いに集つてきたことなども書かれている。太二君は多分その生徒の中の一人だつたのだらう。また昭和四年三月十八日角田さんに従つて仙ノ倉山に登つた孝太郎は、五、六年前のこと、鉄砲が発火したためにとうとう熊にやられたと太二君は語つていた。元橋や二居にはまだ角田さんをよく覚えていて、非常になつかしがつていて、人達が多いことを知つたのだ、機会があつたらこれらうのことを是非同氏に伝えたいと思ふのである。

翌朝起きてみると、国境山脈の高い所は、依然南側から吹きつけるガスのためかくれてはいないが、越後の空は北の方までずつと晴れていたので、もし悪くなつたら三國峠へ逃げることにして、平標山へ登つた。頂上までくると視界はまるできかず、そのうえガスと笹にたまつた露とで下半身はぐしよぬれになつてしまつた。それでも天気はとくに悪化の微もないので、予定通り仙ノ倉からエビス大黒の頭を通り、毛渡の小倉まで行つて弁当を開く。一向に晴れてくれないガスのなを万太郎山を越え、その北尾根につけられた吾策新道を下つて行くと、やがて濃いがすから解放されて、平標以来はじめて暖かい陽の光をあび、乾いた岩に腰をおろしてゆつくりくつろぐことができた。

策ヶ岳

日高信六郎

苗場から国境尾根にかけてはまた濃いガスがこびりついていたようにからまつていて、北の空は青く晴れて七ツ小倉から巻機山の方面がくつきり眺められ、飯土あたりが箱庭のようにきれいだった。われわれはこの尾根の長い下りにあきあきし、何度も休んだものだから、夕闇に追いつかれながら土樽への路を急いだのだつた。

(一九五七年九月廿二日廿四日)

白峯山脈の南につづく生木割、梃笈、千梃木のあたりは、標高二千六百メートル程度ではあるが、大井川の峡谷をへだてる赤石連嶺の眺望台として、早くから山好きが眼をつけた。中村清太郎さんはすでに明治四十四年の晩秋雨畑から策ヶ岳にのぼつて、光彩ある記文とスケッチを「山岳」に発表され、大正五年には守島山口両君が同じみちから千梃木にのぼつてゐる。しかしこの辺の山は、南ア前衛の例にもれず、低いわり骨がおれるし、何となく人氣がわかず、たずねる人もきわめて少ないまゝになつていた。

私も大正のはじめからこの辺をマクしてゐながら、機会がないまゝに過ぎてしまつた。戦後赤石山脈縦走のやりや、塩見のぼつたときなどに東を眺めて、気高い富士をうしろだてに双峯をぬきんでる策のすがたに心をひかれ、その後七面山にのぼつて、赤石連峯のまゝに立ちのぼつた、赤石連峯を眺め、ますます遊意をそそられた。その頃会員の神谷さん牧野さんたちが、はじめは雨畑からついで保からのぼれた話を聞き、ことし国体に加わつて南ア南端の山谷にふれたのがきつかけとなつて、十一月下旬連休の翌日ひとりで早川の谷に向うことになつた。

富士駅で中食したのち町を歩いて見る。まつすぐな本通りの真正面に富士がドツカリと、晴れた秋空の下に坐りこんでゐるのは、いかにも「富士市」の名にふさわしい。その晩は保(早川に沿う村々は併合して早川町になつた)の橋本屋にとまつた。案内をたのんだ保の望月正一は山につよく親切な三十男でこの辺の山にも詳しい。

早川にわかれて広河原の小倉まで交流の保川に沿う、むかしのトロ路でわかれて、川があるののでずいぶん分かれておられ、丸木橋と梯子で川を渡り崖を上り下りする。谷は巨岩と流の連続でなかなかいい。近ごろ川の中流両がわの民有林を本州製紙が買ったそうだから、またいゝ路が開けるのも遠くないと思われ、それだけ山の景色が損われ谷が荒れることになるのはさびしい。小倉は川に近く八人はらくに泊れる。ここで中食し、二股にわかれた保川の中に派手する深い木立の尾根を急登する。海拔二千米のところをちよつとした平地があり(牧野氏命名の富士見平)、トタン葺の四人くらしいか入れない小さな小舎に泊る(水場はなお一時間ばかり上だから、野営するのならそこまで登つたほうがよい)。昼ごろから降り出した雨は夜はげしくなつたが、翌朝はやんで曉の富士が正面に美しくつた。ここからまた二時間ばかりの急登をふける、木立の間から赤石山脈を正面に見る稜線に出て左折策にむかう。この辺は石楠花が多く、上に行くとき松があらわれる。頂上は岩と這松と石楠花に覆われ、展望は四方遮るものなくすばらしい。富士は小笠の真上に雲海をぬき、西は聖赤石愚沢から塩見、仙丈、白峯と大観はつゞいてわれらに有頂天にした。雪は稜線付近から上に、昨日ふつたのが少し残つてゐる程度で、赤石には雪があるが聖には全然雪が見えない。こゝから見る北岳はすどく尖つて天を刺す。

間近には生木割のガレが真白く大井川にナギ落ちてゐる。頂上でゆつくりして、同じみちを降り下の小舎で一泊し、翌日ひるのバスをつかまえて身延に出た。谷の紅葉はすぎえていたが、せまい谷を覆つて舞う落葉はきれいだった。

雨畑からの登路は奥沢の伐採が引上げた後は荒れてえらくわるくなつたが、いづれまた伐りはじめから路がよくなるだろうという噂を聞いた。近頃は保からの登山者が漸くふえ、この連休には二十八人入つたといふことであつた。保では宝乗寺に住む平山新吉氏が登路開拓に熱心で、前記二つの小舎も同氏が管理しており、頼めばお寺に素泊りの便もある。

晩秋の奥秩父

村井米子

十一月末の連休を奥秩父へ入つて、快晴に恵まれ、山々の展望と落葉踏む山旅のよさを味つた。新

宿駅の登山者の大群集はスキー持参も多かったが、大半は大雪で下車した。しかし臨時列車の何本分も溜る少海線は大混雑、かつ一時間余を待つ朝の時間が惜しい。それで梓山着は十時になつてしまつた。

バスに乘合せた大リユック組は、今夜大タルミ小舎へ入り、国師から金峯と縦走し金山へ出るコースだ。新しい林道を利用して山中一泊とは魅力、来春を期したい。

三国峠までは二時間、甲武信、国師、金峯の山脈、さては八ヶ岳の展望が素晴らしい。峠を越えたとそれまでのゆるい草山が、急に苔深い大森林の秩父色となり、ふり分けの瘦せ尾根が急峻、落葉が深く、中津川溪谷のトロ道へ出るまで誰にも逢はず山気分が快い。峠から中津川まで四時間、幸島家へ一泊。

翌朝やゝ曇なのでゆつくり出発、金山を経て両神山の八町峠へ向う。登るうちに晴れてきて、秩父連山の展望が美しい。峠へ出たらパツと上州側の谷が目の下に、はるか雲際には浅間から日光までの山々の間に、谷川連峯の白い。素晴らしい大観だ。

八町峠は両神山の西端で標高千五百米、中津川との差八百米、三時間半かかった。納宮の終バスは四時なので、両神山頂は割愛し坂本へ下りた。目の前の二子山の岩が見事に秋風に映え、河原沢川添ひの農家が美しく、吊し柿とこんにやく芋を切つて吊した風景面白く、納宮まで急ぎつつ山村風景もたのしめた。

南極観測隊便り

村山 雅美

十二月七日、ケープタウンにて冬の真中の東京を想いながら、いよいよ南下します。出発前はいろいろ御世話になりました。

ケープタウンでは、ドライブとテニスに余暇を費やし、若い連中と共に岩登りに行くことは出来ませんでした。しかし、白・黒両山岳会との交歓は連日愉しくやりまじした。来年一年御無沙汰するわけですがまた新しい計画が生れていくことを期待します。

ちょうど今われわれの隣組となるベルギーの連中と諸種の打合せをしました。何処も同じ目的の人達と会うのは愉しむべきです。JAC会員諸兄姉によろしく、では御機嫌よう。さよなら。

南極の足軽隊

村山 雅美

学術会議の南極観測隊に参加するわれわれのために歓送会をやつて下さる様に御話があつたが、いよいよ出帆の日が迫ると日頃の気楽生活の行き当りばつたりを総決算する止む無きに至り、あわただしくて御辞退せざるを得なくなりました。何卒御許し下さい。

まことに申し訳ない次第で深くおわび申し上げますと共に御厚意を厚く御礼申し上げます。
こんどの本観測で南極に行く隊員五〇人のうち、日本山岳会の

員は学生部で団体加入していた若いOBを含めると大体十人位いるようです。

吉井、中村君は観測の学者として参加しているのだが、その他の山岳会の会員は設営担当です。設営担当とはどんなことをするのかこれもはつきりしないが、鳥居商事、丸南通運、清水建設、中村屋中央市場、鈴木膳写堂などといわれているいろいろ雑事を受持つてゐる。

学術会議の南極地域観測隊特別委員会では観測部門の報告が一つ一つ行われたあとで「その他について」といわれて報告することになつてゐるのがわれわれの仕事である。

われわれは自分で足軽といつてゐる。南極の足軽隊なのだが、ひがんでゐるのは勿論ない。予備観測では「宗谷」の定着地点から基地まで二十七キロあつたが二十七キロの長さは各国の南極隊で今までの例のない長さなので、条件の変化により、どんなにわれわれを悩ますか、越冬ではどんなことになるのか、そんなことを考えて山好きの連中が選ばれたのだらうと思ひます。

事実マナスルやアンナプルナ、カラコルムの装備や経験を大いに役立ててもらいました、そんなわけで山好き連中は縁の下力持ちだから足軽だと自分で呼んでゐる次第です。

足軽の歌があつて
南極の歌を
足軽が歌うよ

南極 南極 南極よ
足軽の歌を

南極で歌うよ
足軽 足軽 足軽よ
というなかなかいい歌である。

丸南通運で歌うとソーラン節、炭坑節に比較するわけです。
足軽隊に去年は博士が沢山いたが、今回は鳥居君だけになった。それでも足軽隊の方に博士が多いことには変りがないと鳥居君はいつてゐる。

ヒマラヤと南極とどつちが面白いかとよく聞かれるが、それは山好きのわれわれのことだからヒマラヤの方が面白い。
だが、南極も面白い経験です。低い太陽と氷原の色彩などはたまらない美さであつて若いアルビニストが歌う。

俺たちは街には住めないからに
というところであるうか。

今度の越冬には南極大陸の観測旅行がテーマになつてゐるから大いに楽しんで期待してゐる。こんどは雪上車とトラックターと合せて八台持つて行くし専門の整備士やメーカーの技術者も越冬するので機動力をかなり発揮できるだらうと考えてゐます。

犬ぞり隊は一チーム残る。犬ぞりはめんどろだが興味ある仕事である。

昭和基地では坪八十万円の家に住むことになりましたが、大陸旅行に出ればウィンパーテントとラヂエウスの生活です、只今も予備観測の越冬隊が二十五日の旅行に出ています。

長い冬の生活にも興味が持てるし、一晩泊り(越冬)で帰つて来たらいろいろと御話できることが

あるかと思ひますが、日帰り旅行(越冬しない)の連中が帰るときには予備観測の一泊組がケーブから一足先きに飛行機で帰つて来ます。山岳会の西堀、立見両氏が帰つて来ますからいろいろとお話お聞き下さい。

では行つて参ります。
十二月二十日

鹿沢紅葉館主の計

いま四十代五十代で山やスキーに熱を上げたことのある人達、殊に関東の人達の中には、往昔スキーのよき練習場としての鹿沢温泉を訪れ、紅葉館主小林龍蔵君の独特のスキー術と愛すべき風貌に接したものは少くあるまい。
誘えばよく山へも同行してくれ、理論はともかく場数をふんでゐるだけに、しつかりしたスキーで、よくわれわれは講釈されたものだ。昭和三十年二月久振りに訪れたときは二十四年ぶりの再会を喜んでくれ、また近い内にと約したのだつたが、昨年六月八日七十六才で病没したとの報に接した。多くの人に親しまれたオヤヂがまたひとり減つて、オールド・ボーイズは淋しく思う。(T.F.)

おわび

山岳第五十一年片桐の広告中ピッケル門田作尺もの三五〇〇円とあるは三八〇〇円、アイゼン門田作八本爪三五〇〇円とあるは三八〇〇円の誤りにつき、ここに訂正おわび致します。

図書紹介

世界処女峰

初登頂物語

三木 高 岑 著

関西の岳人として著名なる三木氏が、その四十余年の登山歴の後半、文献研究に没頭された中から生まれた書である。

アルプス、カウカサスとピレネー、アラスカ、シベリア、カナディアンロッキーとアメリカ、アンデスと南極、アフリカ、ヒマラヤ等、世界各地を十章に分け、先進登山家の業績と奮闘とが述べられている。これを範として、若い登山家が山に親しまれんことを念願すると、前書きされていること、く、中学上級生にも解る程度に、くだいてある。

著者が多年にわたって海外の登山書を読み、その中から興味深いものを抜粋されたというだけであつて、一々の章に、孫引きの書では味へぬ原書の面白味が映つてゐる。エピソードなども多く入つていて、読むのにたのしい。

世界各地の山々の初登頂を、実に綿密にあつてあるから、読む者は、この書によつて世界中の山を知るとともに、世界の山岳人の気質、山岳文化の進歩の様子なども、種々のことが解つてくる。しかも何れもその核心をついていて、日本隊のマナスル登頂には、横隊長の謙虚な態度が挙げてある。

口絵写真も数多く、かなり鮮明で、終りに世界高山初登頂表のあるのも親切だ。

登山熱が高校生中学生に拡つてゐる折から、正しい登山精神の涵養のためにも是非読ませたい書である(村井米子)(実業之日本社三〇〇円)

会務報告

十二月役員総会 十一日(水)

▽場所 本会図書室

▽出席者 別宮会長、理事折井、小原、金坂、辰沼、松丸、大塚、村木、徳久、野田、山崎、▽評議員望月、監事諸岡、石原、木津富山支部長

▽議事および報告

①海外登山審議の件、日大を主体とするヒルチューリ遠征は財政的な面でのメドが付き次第登山岳会で援助する。

②スポーツ技術委員会設置の件、

③静岡支部の件

④山日記および会員名簿の件

一月役員総会 二十一日(火)

▽場所 本会図書室

▽出席者 別宮会長、日高副会長、理事折井、辰沼、太田、山崎、金坂、石坂、村木、徳久、松丸、評議員成瀬、交野、監事諸岡

▽議事および報告

①宮城支部設置の件、役員会で承認する。

②遭難対策の件

③山岳五十年広告集金の件

④市川梅子氏より寄附金の件

⑤谷川岳遭難映画の件

⑥三笠書房出版山岳写真集を山岳

会監修とする件

関西支部ルーム変更

関西支部ルームは今回大阪市北区老松町三丁目新ビル内に移転した。

第一七七回小集会 九月三十日午後六時から体協会議室で木村久緒氏の「チベット旅行談」があつた。

第一七八回小集会 十二月二十日午後六時から体協会議室で中根チエ子氏の「東北インドの旅」があつた。

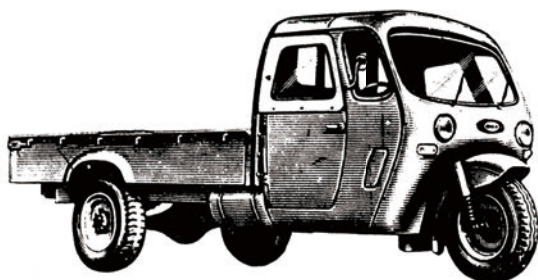
第一七九回小集会 一月二十三日午後六時から体協会議室で川森登喜子氏のスライド「ヨーロッパの旅」松方三郎氏「アルパイン・クラブ百年祭に出席して」(別項)島田翼氏の「ガルツェン会見談」があつた。

図書寄贈 中華全国体育総会より「Conquering the Father of the Ice Mountain」が寄贈された。

新入会員

四五九八 鈴木淳平 埼玉県北足立郡蕨町三ノ九七八
四五九九 菅原 宏 川崎市月木祇園二七一
四六〇〇 小野尚俊 世田谷区羽根木一、八三五
四六〇一 河野幾雄 大田区本蒲田二ノ一二
四六〇二 古森金蔵 兵庫県川西郡寺畑北ノ山八
四六〇三 寺本 滉 兵庫県神戸市楠町一ノ一九
四六〇四 平柳一郎 神奈川県藤沢市大鋸二七四 鈴木晃方

ゆったりした3人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- ・アンダーフロアエンジン
- ・オーバーヘッドバルブ
- ・AB型2吨積

他に1吨車の決定版とご好評を頂いておりますTR型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野デゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております



HOSONO
TOKYO

NYLON TENT
SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

お知らせ 来る五月二十四日から神宮競技場を中心に行われる第三回アジア競技大会の前売券がルームにありますから御入用の方は申出で下さい。ただし主競技場のみ。

訂正 マ一九五号AC百年祭記事中全会則七二条とあるのは十二条の誤り。また山岳五十一年新入会員中植末清一とあるのは植松の誤りにつきそれぞれ訂正します。

昭和三十三年二月廿五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
発行所 社団法人 日本山岳会
編集者 山崎 安治
電話 神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂

頒価二十円

たかはら

名人気算の店

本店、四谷、大蔵省横入ル
TEL. (33) 1912

支店 八重洲口第2鉄鋼ビル前
TEL (27) 1560

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO 1

合資会社 代表 平林三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8~3740

TEL (76) 5882



PRICE LIST 進呈

登山とスキー具

イワタ

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL (27) 7686

秀	山	荘
	Ski と 山 の 用具	

ブライス・リスト 進呈
電話 東京 (28) 8456
中央区 八重洲 4ノ1
東京駅・八重洲口ヤンマービル横丁